説教20220710「近くにある人」申命記30：9-14　ルカ10：25-37

今日のルカ福音書は、よいサマリア人の話で、皆さん聞かれたことがあることでしょう。エルサレムからエリコへ至る寂しい下り坂で、おいはぎに遭って半殺しになって倒れている人がいたのに、祭司とレビ人はその人を無視して通り過ぎてしまいました。その一方で、あるサマリア人はこの人を憐れに思って手厚く介抱して、宿屋まで送って、今後の生活の為の費用まで支払ったというのです。

私たちはイエス様からこの話を聞いて、サマリア人の姿を通して実際に人を憐れむことの大切さや喜びを知らされます。イエス様は言われます。「行って、あなたも同じようにしなさい」ここでのあなた、というのはイエス様の憐れみを受けている私たち一人ひとりのことです。私たちは、イエス様から受けた憐れみを、この様なよい行いで隣人に示すことも出来ますし、又、子供たちなどに、このよいサマリア人の話をして、子供たちにイエス様の憐れみを伝えることも出来るでしょう。

さて今日は、この単純でわかり易そうな話を、律法の観点から見ていきたいと思います。こういうと、何もわざわざ話を難しくしないでも良いのではという思いにさせられるかも知れません。が、実は反対で、或る意味、このサマリア人の話がすっきり理解できるようになるかと思います。今日はそれを目指したいと願います。

私たちは、子供たちにこのサマリア人の話をする段階ならば、冒頭のように、サマリア人は善、であり、祭司とレビ人は悪、この律法の専門家もイエス様を試そうとしているので悪、という様に決めつけて話をしてしまいがちであり、それも致し方無いところがありますが、大人はそんな風なステレオタイプの善悪の話を聞かされても、心動かされないかも知れません。あまり心に入ってこないのです。それはなぜかといいますと、大人というのは自分の長年の経験により、この祭司やレビ人のように瀕死の人を無視して通り過ぎることが、赦されるとまでは言えないまでも、致し方ないのではないかと考えてしまうからです。私自身も過去を振り返れば思い当たる節があります。この別府駅の界隈では何人かの浮浪者の方が外で夜を明かされています。彼らに私は何回も出会いながら、彼らに対して何一つ憐れみを施してはいないのです。そしてそれを正当化するために、「私が声を掛けないでも、今の世の中の行政が必要な措置を施すだろう」と考えてしまうのです。更に、「ここで私が手を出すのは越権行為である」とまで思い出すかも知れないのです。

主なる神の憐れみを知っていながら、この様に憐みの業から遠ざけられている私の姿は、今日、イエス様に質問をした或る律法の専門家の姿に重なります。彼は、主の憐れみも、主の愛も、又隣人愛もよく知っていました。専門家というだけに、普通の人よりも、こういうことに対する洞察は深かったと思われます。私たちは、この律法の専門家がイエス様に質問し、或る意味対決しているから、すなわち悪いのだと決めつけてしまうと、理解が浅くなります。

ではこの律法の専門家が考えていることに耳を傾けましょう。彼は『心を尽くし、精神を尽くし、力を尽くし、思いを尽くして、あなたの神である主を愛しなさい、また、隣人を自分のように愛しなさい』という律法の御言葉をよく知っていました。この律法は、レビ記や申命記に記されている御言葉です。律法の専門家はこのことについて長年思いを巡らしてきました。今でいえば法学部の教授の様であります。そして彼が、今もっとも気になっている事といいますと、それは29節に記されています。「では、わたしの隣人とはだれですか」、このことが彼が知りたかった第一のことでした。この節には「彼は自分を正当化しようとして」というように説明がなされていますが、これはちょっと先走った説明になっています。正当化しようとしての意味は、おいはぎに襲われたこの人が、祭司やレビ人の隣人ではなかったとこの専門家は解釈して、だから、この時彼らが無視して通り過ぎたのを正当とみなそうとしたという意味です。無視して通り過ぎたのが正当だった、と聞きますと、なんと憐みがないことかと、嘆かわしいですが、しかし先にも申し上げましたように私たちは憐みを感じて憐みの業を為す前に、そのことを諦めているのです。

「わたしの隣人とはだれですか」この問いは、聖書においてもっとも重い問いかけの一つです。この問いは旧約聖書の最初から、今の私たち人間に問い続けられています。一方には隣人を身内だけに限る排他的な隣人理解があます。それは例えば、十戒にも表れていまして、十戒の最後の第１０番目、出エジプト記 20章 17節になりますが「隣人の家を欲してはならない。隣人の妻、男女の奴隷、牛、ろばなど隣人のものを一切欲してはならない。」とあります。ここに「隣人の妻」と記している時点で既に、隣人を男性のみに限り、女性を隣人として見ていない、いわゆる家父長的な制度が露わになっています。そしてもう一方で、隣人の範囲を出来る限り広げようとする主なる神の思いがあります。レビ記 19章 33節からになります。

「寄留者があなたの土地に共に住んでいるなら、彼を虐げてはならない。あなたたちのもとに寄留する者をあなたたちのうちの土地に生まれた者同様に扱い、自分自身のように愛しなさい。なぜなら、あなたたちもエジプトの国においては寄留者であったからである。わたしはあなたたちの神、主である。」寄留者というのは、よそ者であり外国人でありましたが、隣に住むようになれば、彼らも出来る限り、隣人関係の輪の中に加えようとする主なる神の思いが見て取れます。最終的に主イエスはこの隣人関係の輪を、全ての人、即ち、男も女も、国の違いも、貧富の違いも、地位の違いも区別なく、一つの輪の中に広げようとされているのですが、それはそんなに簡単なことではなく、今もその広げようとする努力は進行中と言えるでしょう。隣人愛を、分け隔てなく誰にでも行うことの難しさは、私たちのごく身近にあります。例えば、親しくしている友人の配偶者に対して隣人愛をもって接していると自分では思って、そのようにふるまっていると、思いがけずその友人から憤慨されて、友人との関係性も悪化してしまうなどといったことが起こります。まあそこには、人間が持つ嫉妬心ですとか驕り高ぶりの情といった善くない性格が現れるのですが、実際問題、隣人愛を純粋に広げて深めていくのは、大変に難しいことであることに皆さん既にお気づきのことと思います。

このような、私たちのごく近くにある、喜びでもありかつ得難い隣人について、律法の専門家をはじめとする聖書の民たちは思いを巡らしてきたのです。隣人愛は、全ての人間関係のです。夫婦関係も親子関係も、聖書が説くところの隣人愛に基づかなければ、無味乾燥で長続きしない関係になってしまします。又、隣人愛は、或る時偶然居合わせた人たちの間にも培われます。イエス様が旧約聖書に記された数多くの律法を、『心を尽くし、精神を尽くし、力を尽くし、思いを尽くして、あなたの神である主を愛しなさい、また、隣人を自分のように愛しなさい』という短い文章にまとめられて、そこに神の愛と隣人愛とを語られているのには、計り知れない重みがあるのです。律法を廃棄する為ではなく完成させるために私たちのところに来られたイエス様は、この様に律法をわかり易く私たちの前に示し、そこに説かれている隣人愛をクローズアップさせて、とにかく全ての人に対して隣人愛を持ち、隣人愛を行いなさいと言っておられるのです。

さて、今日は、律法の専門家に寄り添い、彼が考えてきたことに思いを巡らしていますが、彼が「では、わたしの隣人とはだれですか」とイエス様に問うたとき、確かに彼が自分を正当化しようとしたその意図は否定できませんが、ではそれだけであったのだろうかという疑問は残ります。彼は律法の専門家ですから、律法が説くところの隣人関係の範囲を、彼なりに頑張って拡大解釈しようと努めていたのではないかとも思えます。つまり、彼は、隣人関係が広げられることの喜びを知っており、広げられることを願っていたのかもしれません。だから彼は本当にイエス様に教えを乞うような純粋な質問として「では、わたしの隣人とはだれですか」とイエス様に問いかけたのかも知れません。

そして彼に対してイエス様は素直には答えられませんでした。イエス様は逆に彼に質問をします。「さて、あなたはこの三人の中で、だれが追いはぎに襲われた人の隣人になったと思うか。」こんな風にイエス様から質問された専門家は、ドキッとさせられたことでしょう。なぜならば、専門家はそれまで、私にとって、この瀕死の状態で道に放置されている人は、隣人に該当するのかどうかをひたすら考えていたからです。私にとってこの人が隣人に該当するならば、私はこの人を助けるべきであり、私にとってこの人が隣人でないなら助けることはない、などど彼は考えていたのでしょう。しかしこのような考えや思いでは、彼はどっちに転んでも、この人に憐れみをかけることは出来なかったでしょう。そこには義務としての救助活動があるだけかもしれません。

ところが、イエス様は全くそうではありませんでした。イエス様はあくまで、追いはぎに襲われた人にとって誰が隣人になったのかを問うておられます。相手からみて自分が隣人になっているかどうかをイエス様は問うておられます。

イエス様の憐れみによって、私たちはお互いに隣人とされました。本来、隣人に対して憐れみをかけることは、私たちが孤立して生きることや孤独な存在であることから抜け出るための唯一の方法と言ってよいでしょう。なぜなら憐れみをかけること自体が、私たちの内に喜びを生み出すからです。ところが今の世では、多くの場面で憐れみをかけること自体が遠ざけられていたり、禁止されていたりしています。それは悲しいことですが、私たちは嘆いていてばかりもいられません。隣人の輪が広げられ、出来るだけ多くの人に憐れみをかけられる世の中が、この地にあっても日々実現していくことをイエス様は願われています。この律法の専門家のように、純粋に「隣人とは誰かを」問いかけることも無駄ではありませんが、私たちが、まことに律法を喜びの言葉として、ごく近くに、私たちの心と口とに迎え入れるということは、実は御言葉であるイエス様を私たちの内に迎え入れるということです。私たちはイエス様を自分の内に迎え入れれば、自分中心の思いや考えの生き詰まりから、思いもかけない仕方で、改心させられ、イエス様の慈しみを行う隣人関係を知ることが出来るでしょう。その喜びの道を出来るだけ多くの隣人たちと共に歩んで参りたいと願います。

祈ります

憐み深い父

あなたは、私たちの隣り人として御子イエスを下さいました。憐み深い御子によって、私たちが常に生かされ、祝福されて歩める恵みに感謝します。御子のもとに立ち返り、隣り人に憐みの業をなす喜びを　私たちに得させてください。

苦しみに満ち行き詰りの状態にあるこの世にあって、隣り人を傷つけるのではなく、隣り人を憐れむことが出来る社会を、私たちにお与えください。私たちが心を尽くし、知恵を尽くして隣り人を愛することが出来ますように。

あなたの御言葉は時に厳しく聞かされる戒めでありますが、永遠の命へと私たちを導かれるあなたの御言葉は全て恵みであり、全ての御言葉を私たちが喜んで受け入れていくことが出来ますよう、御子のそばにいつもいさせてください。

父と聖霊と共に